

親鸞が関東での仕事を終えて故郷京都へ帰ったのは貞永元年(1232年)六十歳過ぎた頃でした。思えば四十二歳で流刑地越後を出てからほぼ二十年間の関東生活であったわけです。この間、法然門下、同輩先輩を頼つて一切経などの資料を渉猟しながら『顕淨土真実教行証文類』(教行信証・本典ともいう)を一応完成させました。

と同時に、主に新興武士や神職などその土地土地の指導者を教化し、その人たちを中心に農民庶民にひろく真実信心のおしえを拡げていきました。横曾根門徒・鹿島門徒・高田門徒など関東から南奥州にわたる広い範囲に数多くの門徒集団が生まれていきました。

しかしこの間の二十年は決して平坦な道程ではありませんでした。まず、関東はその土地柄として、加治祈祷などの土俗信仰が一般的でした。その根強い土俗信仰とどう向き合うかは深刻な問題でした。これとの向き合の方を誤れば、浄土真宗ではなくなるし、あくまで妥協を拒否すれば激しい反発にさらされます。現にこのことで時の幕府に訴えられ、また念仏禁止の弾圧にあつたことも幾度ありました。

親鸞の生涯

26

関東から京都へ

親鸞が関東在住20間は、このような内憂外患のなかの二十年であつたのかもさらいいろいろな質問(非難中傷を含んだ)がもたらされています。

親鸞の関東在住20間は、このようないい處にも、しばしば関東の有力弟子がもたらされています。



同じ命を

念佛同行

私の幼いころ、家には父は戦死して居ませんでしたし、女のきょうだいはまだ赤ちゃんでしたから、朝幼稚園に行く前の時間は、いつも母と二人きりでした。

土間の竈で炊いたご飯を器に高く盛り上げてお仏壇に供え、なにやら短いお経のようなものを唱え、それが終わると、その「ご飯さん」を下げる、母の作った「お味噌汁」で朝ごはんをいただきました。

「如来さまからいただいご飯さんやからこぼさんように」。これが母の口癖でした。

「如来さんにいのちもろうているので」。とも、「十方衆生」と呼んでくれるのやそうやで、どなたとも仲良しひせんとあかんのやで。きょうだいやで：というのが幼稚園にいくとき母の送り出す言葉でした。

その母は、私が小学校3年生のとき死にました。

私はいま70歳を越えましたが、いま

ころになつてあの母とありありと出会うことが増えたように思います。

「ご飯さん」や「味噌汁」のおいしさはこの体が今でも覚えていて忘れません。それに「如来さんにいただいた命」ということも今になつて頷づけるようになりました。

所詮この世を生きている以上、払おうとしても拭おうとしても汚い泥まみれのわたしですが、そのわたしが如来さんから「みんな來い。十方衆生だれもきょうだいや」と願われているとございました。

わたしには母も如来さんと一緒に、いまもわたしを念じていてくれると思います。

それと最近よく「人との出会い」の大切さを聞きますが、それは現在社会の人間の出会いは「睦み合い」「和み合い」ではなく、自分と他人、自國と他国を対立させ、そのなかでの「たたき合い」「競い合い」「殺し合い」の人間関係ばかりが横行しているように思います。

母は、「如来さんから十方衆生とよんでもくれるのやで誰とも仲良うしいやあ」世の中にはいろいろ人もいますが、そのところではわたしはだれとでも出会えるのだと、今になつきづかされました。

孔子さまがその高弟に語った『論語』の有名なこちとば。

「へ知る」ということの本当の意味を教えよう。自分の頭でわかったことはわかつたとしていい。だが分からぬことがまだまだいっぱいあるのだということを知つてこそ、これで知つてているといえるのだ」

知つたかぶりほど見苦しいものはないし、人生の落とし穴と指摘した言葉。

「ええ加減にセー」

ああ言えばこう言う。こう言えばあ

あ言う。付け加えたり減らしたり。言い逃れをする僕を、こんなことばで叱りつけてくれた親父が懐かしい。

それはそれなりに同じ命をもろうでそれを生きているもの。たがいに対立や競争ではなく「如来さんからいただいたいのち」と早うきづかせもらおうナと念じながらの出あいでありたいと思いました。

あるお寺の毎月の新聞は『同朋(とも)』と言います。朋は「にくつき」ふたつ。「如来さんからいただいた同じいのちを肩寄せ合つて」という文字だそうです。

有り難いことです。

おばあちゃんが風呂に入る。五右衛門風呂の下で僕はヒフキ竹で必死でオキを吹いて燃やす。「ばあちゃん、どうや」とたずねると、バアちゃん、「おおきに、おおきに、ええ加減やで」。つきかあちゃんがはいったときも同じ。しかし、かあちゃんにはかあちゃんの湯加減がある。

オキを足して追い焼きをする。「おおきに、ええかげんやでー」。

一人一人に合った湯加減にしてあけるので僕は風呂焚きの名人にされていた。



知らずとなるを



知らずとなるを

孔子さまがその高弟に語った『論語』

の有名なこちとば。

近ごろ先生の教えも一把一からげ。それでオチコボレが出てしまう。

お料理も全国どこでも同じ味。

何にかぎらず個性無視。メディア。文化すべて。

ええ加減